



Title	親と子のことば（母語／継承語／日本語）をつなぐ多言語創作デジタル絵本の取り組み
Author(s)	滑川, 恵理子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ Column 4 ≫

親と子のことば（母語／継承語／日本語）をつなぐ 多言語創作デジタル絵本の取り組み

キーワード：多言語デジタル絵本、母語／継承語、アイデンティティ・テキスト、
multilingual digital picture books、mother tongue / heritage language、
Identity Text

活動の背景

CLD 児（Culturally and Linguistically Diverse Children）はその呼び方の通り多様な言語的・文化的背景のもと成長しているが、日本で暮らす CLD 児の場合、日本語および日本の文化ではない言語的・文化的背景、即ち母語／継承語・母文化が見落とされがちである。一方で、外国出身の親たちは日本語と日本の文化・習慣などに圧倒され、子どもたちの教育に自身の言語や文化を積極的に活かすことができない社会の雰囲気がある。母語・継承語は親子をつなぐことばとしてあまり大きな力をもっていない家庭が多いように思われる。

筆者は自身もボランティア支援者として参加する地域の支援教室の仲間に呼びかけ、外国出身の親たちが母語を介して子どもたちに語ることを応援する活動を始めた。この教室で読み聞かせをルーティンの活動としていることや、ボランティアの中にセミプロ絵本作家がいることなどの教室の「資源」を活かし、CLD 家族のエピソードなどを題材に母語と日本語の 2 言語によるオリジナルの絵本を製作することにした。そして創作絵本をウェブサイトで公開し、国内外の母語・継承語活動に興味をもつ人々とつながることを考えた。

当事者自身の「物語」への関心は「アイデンティティ・テキスト」（Cummins & Early, 2011）の理念に表れている。これはカナダの小学校で全国プロジェクトの一部として行われた教室実践の中から生まれた概念で、子どもが母国を離れて入国した時の体験や祖父母の元を訪れた体験などを題材に絵本などの様々な形式・媒体の作品を創作するというものである。

ウェブサイト「たげんごオリジナルえほん」

ウェブサイトは 2021 年 8 月に公開され、2023 年 12 月現在以下のデジタル絵本 5 作品を公開している（youtube で視聴可能）。<https://tagengo-orijinal-ehon.com>

公開後いち早く親たちの母国の家族や友人たちからコメントや「いいね！」が送られてきて、インターネットを利用した世界への発信に手応えを感じている。

- ①『ヤンヤンちゃんとおにちゃん』（中国語／日本語版）：中国出身の母親が幼稚園に通い始めた頃のエピソード。中国語の文は母親と筆者が協力して書いた。当時小 5 の次男が日本語台詞を考えてくれた。
- ②『みんなそれぞれ反抗期』（日本語／スペイン語版、日本語／中国語版、日本語／アラビア語版）：教室に通う母親と日本人ボランティアたちとの何気ないおしゃべりから発展した漫画タッチの絵本。ある外国出身の母親が思春期に入った息子の反抗期に戸

惑っていると話したことから、外国出身の親たちもボランティアも実に多様な親子の関係や「反抗期物語」を語り始めた。文化や世代の多様さがつぶさに反映されている作品である。

- ③『おばあちゃんはおこりんぼ』（スペイン語／日本語版）：2人の娘が欲しがめるものは何でも買ってあげたというメキシコ出身の母親。それは大変な暮らしの中、祖母に厳しく育てられたことへの反発だったが…。
- ④『きっといつか…』（アラビア語／日本語版）：シリア出身で家族と日本で暮らすSさん。明るく聡明で仕事でも地域でも活躍するSさんの原動力である大切な人のこととは？
- ⑤『アー、ガッ！わらった わらった』（アラビア語／日本語版）：シリア出身のSさん夫妻の3人目の子どもの誕生に纏わるエピソード。シリーズ初、子ども2人を含む家族全員がアラビア語と日本語の2言語音声で大熱演！

多言語創作絵本作りを通じてどのような気づきや成果を得たか

絵本作りは、まさに外国出身の親たちと制作者（絵本作家と筆者）が言語と文化を丁寧に擦り合わせて理解を深めていく過程であった。例えば、上の③の制作過程で、お願いする時に日本では手を合わせて訴えるが、メキシコでは相手をまっすぐ見て両手は下げたままが適切だと分かった。服装やお祭りの様子などは母親の写真や映画などを参考にした。2言語がそれぞれ最的確で、しかも自然であるか、時間をかけてやり取りと検討を重ねた。そして活動を通じて、それまで見えてこなかった外国出身の親たちの人間像や置かれている環境を日本人ボランティアが知ることになったことなどが観察された。さらに子どもたちの特筆すべき反応として以下を挙げる。上の①の絵本を手にした当時中1の男児は普段疎遠な母親の母国に住む祖母を「これ、おばあちゃんの若い頃？」と具体的にイメージすることができたという。また、上の⑤は公開直後に地域の支援教室のクリスマス会でお披露目したが、自らもアラビア語と日本語で熱演した当時小4の男児は、その上演直前、普段彼の日本語学習を担当しているボランティアに自分から「ぼく、アラビア語で話すんだよ」と話したという。彼が父母からアラビア語を本格的に学んだのはこれが初めてだった。信頼している人に自発的にそう話したのは、2つのことを話すことに誇りをもったからであろう。CLD家族の物語をデジタル絵本として発信し続けることの意義を再確認した。



© たげんごオリジナルえほん

（この活動は JSPS 研究費（若手研究）19K13245 の助成によるものである）

引用文献

Cummins, J., & Early, M. (2011). *Identity Texts: The Collaborative Creation of Power in Multilingual Schools*. Trentham Books.

滑川 恵理子（京都女子大学）